

2022年度
年次報告書

一般財団法人 日本青年館

1. 公益活動

1. 青年活動振興事業

1) 第70回記念全国青年大会

全国青年大会は、講和条約発効を記念して1952(昭和27)年に第1回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ、文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加する大会です。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置いて、平和で文化的な住みよい地域づくりを目的にこれまで事業を実施してきました。



第70回記念全国青年大会は11月11日(金)～14日(月)にかけて開催しました。今年度は、コロナの影響で各地域での道府県大会の開催が困難であるという声が寄せられたことも踏まえ、12種目で参加者を募り、参加チーム数が規定を下回った種目については実施しないこととしました。その結果、締め切り時点で5種目が要項に定めるチーム数を満たさなかったため、スポーツは軟式野球、剣道、バスケットボールの3種目、文化は写真展、生活文化展、意見発表、舞台発表4種目の計7種目をそれぞれ正式種目として実施し、男子バレーボールとフットサルについては、規定チーム数には届かなかったものの参加意向のチームが複数あったため交流種目として実施しました。今大会の参加者は28地域から862名となりました。

2) 第68回全国青年問題研究集会(新たな時代を切り拓く青少年ミーティング)

「青年問題研究集会」(青研集会)は、1950年代に日本青年団協議会が創造した、働く青年の生活課題の解決をめざす学習・実践活動を集約する集会です。1954(昭和29)年に、勤労青年の教育のあり方、考え方として「勤労青年教育基本要綱」を策定した日本青年団協議会は、青年の自主的学習活動として「共同学習」運動を全国に呼びかけました。共同学習運動は、仲間づくりと話し合い学習を重視し、活動や生活の身近な問題を語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組むという、青年



語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組むという、青年

の主体性、自主性による実践的学習運動です。このような共同学習運動の全国的集約と発展的展開をめざす場として、日本青年団協議会は1955(昭和30)年から「全国青年問題研究集会」を開催しています。

第68回全国青年問題研究集会は、3月4日～5日にかけて対面とオンラインの両方を併用し開催しました。対面開催の実施は2018年度以来4年ぶりとなり、19都県から41名(対面33名、オンライン8名)が集まりました。

今年度は実行委員会形式とし、執行部だけでなく宮城県、石川県、福井県、静岡県、滋賀県の県団役員(県青研担当者)とともに作り上げました。今回は楽しい語り合いから次の活動への意欲を高めることを狙いに、参加にあたってはこれまで必須だった活動を振り返るレポート(文章)形式にこだわらず、活動内容などがわかるイラスト、写真、動画なども認めることとし開催しました。また、感染防止のため、分科会編成の人数を4～5名としマスク着用と換気を徹底しました。

実践報告では、昨年度に復活した宮城県柴田町青年会の取り組みが紹介されました。柴田町青年会の大野会長からは、柴田町で活動するジュニアリーダーの卒業生たちの受け皿が地域からなくなっていることと、ジュニアリーダー以外の青年たちも気軽に関わられる団体が求められていることを踏まえ、町の生涯学習課、蔵王町青年会、宮城県団の協力を得て青年会を立ち上げた経緯を報告いただいた。さらに、青年会の復活に至る過程の中での苦労や困難、今後の課題である組織の継承や継続について、活動を強制しない緩やかな繋がりや関わりを通して後進の育成に努めていくことが話されました。

分科会の中では家業に関する悩みや、青年と政治に関する議論、青年団活動と育児や家事の両立などといった活動と生活のバランスについての悩みなど生活課題が中心となりました。また、ウクライナ人留学生も参加しており、母国の戦争の話や終戦後にできる自分の役割を語る場面もありました。

社会が「with コロナ」に舵を切り地域活動が再開してきている中で、こうした活動の実践を集め、青年たちが共に語り合う場所づくりに引き続き取り組んでいきます。

3) 全国地域青年「実践大賞」

「全国地域青年『実践大賞』」は、全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰するもので、全国の青年団や教育委員会などを通じて応募を呼びかけています。今年度は昨年度を上回る15実践が寄せられ、コロナ禍において何ができるかを青年団自らが考え、仲間と共に作り上げた成果が表れる形となりました。受賞した実践は下記のとおりです。

<実践大賞>

香川県小豆島町小豆島町青年団

「～小豆島あんどんまつり～SDGsのヒカリでミライをともしよう～」

■実践概要

小豆島町青年団は、町全体に活気を取り戻し中止となった子どもたちの出番を地域に作りたいという思いから地域おこし協力隊員と協力し夏詣という行事で町内二つの神社に牛乳パックを利用した子どもたちによる手作りのあんどんを灯し、新しい観光名所にすることを企画しました。

<教宣大賞>

大分県大分市舞鶴町青年会

「舞鶴町青年会新聞」・「ウェブサイトを利用した青年会の活動紹介」

■実践概要

舞鶴町青年会は住民同士の接点を増やし地域の行事に巻き込んでいくことを目的に、新聞とウェブサイト(SNS 含)の両方を活用し、活動の詳細や行事に込めた想いを発信し町民への認知と活動への理解の向上に取り組みました。

<田澤義鋪賞>

大分県大分市舞鶴町青年会 「青年が活躍する 活力あるまちづくり」

■実践概要

会員だけでなく町内の青年たちが年間を通して活動に関われるようにするため、懇親会の開催や、無病息災を記念する御獅子さま巡業などの祭礼行事に携わる機会を作りました。さらに他の地域で行われた祭礼の情報収集、新型コロナ対策のためのガイドラインの作成、お賽銭の非接触型への切り替えなどに取り組みました。

<全国青年団 OB 会奨励賞>

滋賀県守山市もりやま青年団 「フォト映えスポット@こんにちワーク」

■実践概要

もりやま青年団が主催する地元の子どもたちを対象にした職業体験事業「こんにちワーク」の10回目の節目に、参加してくれた子どもたちや保護者が一緒に楽しく撮影できるスポットを作りました。白い布に装飾をほどこし、自分たちの好きな言葉を入れることで楽しい雰囲気作りに取り組みました。

4) 第53回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の開催

日本青年団協議会は1966(昭和41)年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970(昭和45)年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集會を開催してきました。

今年度は2022年7月16日(土)～18日(月・祝)にかけて標記集會を現地参加とZOOM参加を利用したハイブリッドで開催し、延べ66名が参加しました。初日は元島民より島での生活や当時の様子などの講話をいただいたほか、元NHK解説委員の石川一洋先生に、今なお続くロシア軍によるウクライナ侵略に関する情報を交えながら、北方領土問題について講演をいただきました。2日目は、国の登録有形文化財である根室国後間海底電信線陸揚施設を視察しました。

5) 国際交流事業

日本青年団協議会は1956(昭和31)年より中華全国青年連合会(全青連)と交流を行っています。また、韓国青少年団体協議会(韓青協)との交流は、2012年に(社)中央青少年団体連絡協議会(中青連)の解散を受け、中青連事務局機能の役割を担う日本青年団協議会が韓青協との交流事業を2015(平成27)年から承継し実施しています。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、昨年度に続き全ての国際交流事業を中止しました。

2. 第69回全国民俗芸能大会

全国各地に伝えられる民俗芸能は、各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって育まれてきたものです。それらは人々の暮らしの推移を物語る貴重な民俗文化財でもあります。この大会は、このような各地の貴重な民俗芸能を舞台上で公開し、民俗芸能の重要性を多くの人々に認識してもらおうと開催してきました。

歴史をひも解くと、日本で初めて地域の芸能を舞台上で紹介したのが1925(大正14)年に初代日本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」でした。以来、これまでに450近い数の芸能を紹介してきました。民俗芸能を継承している保存会等の団体にとっては全国民俗芸能大会への出場が継承意欲の向上につながり、これを契機に文化財としての指定にもつながるなど、大きな成果をあげています。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会でした。



新型コロナウイルスの感染拡大を受け、大会延期が続いていましたが、今年度は11月26日に第69回全国民俗芸能大会を3年ぶりに開催しました。演目は下記の通りです。

○出演団体

- チャッキラコ (神奈川県三浦市)
- 静岡浅間神社廿日会祭の稚児舞楽 (静岡県静岡市)
- 岩村町獅子芝居 (岐阜県恵那市)
- 石鳩岡神楽・土沢神楽 (岩手県花巻市)

新型コロナ感染症への対策として全席指定(無料招待)とし、860名の申し込みがありました。また、大会当日に発行している雑誌『民俗芸能』が100号を迎えたことを受けて、企画委員の伊藤純(川村学園女子大学講師)さんに「雑誌『民俗芸能』100号の軌跡」と題する文章を寄稿していただきました。今大会の企画委員会の構成員は以下の通りです。

- ・山路 興造 民俗芸能学会理事
- ・星野 紘 東京文化財研究所名誉研究員
- ・齊籐 裕嗣 東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員
- ・宮田 繁幸 東京福祉大学国際交流センター特任講師
- ・俵木 悟 成城大学文芸学部教授
- ・神田 竜浩 文化庁参事官(芸術文化担当)付芸術文化調査官
- ・久保田裕道 (独)国立文化財機構、東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長
- ・伊藤 純 川村学園女子大学講師
- ・高久 舞 神奈川県教育委員会
- ・吉田 純子 文化庁伝統文化課文化財調査官

3. 月刊誌「社会教育」の発行

2022年度も月刊誌「社会教育」を例年同様に12回、毎月発行しました。また、「社会教育行政職員のための『虎の巻』」（著者：井上昌幸栃木県総合教育センター生涯学習部長）を300部増刷しました。さらに「多様な実践者がひろげる社会教育：社会教育の再設計シーズン3」を2022年11月30日に発行しました。これは「学びのクリエイターになる！実行委員会」、「社会教育」の連載をまとめたものです。各号のテーマは下記のとおりです。

<2022年度「社会教育」特集テーマ>

4月号(910号) 地域コミュニティの持続的な発展 -社会教育士・社会教育職員・公民館の出番-	(普通号 850円)	96頁
5月号(911号) 地域コミュニティの持続可能性(1)	(増大号 1,300円)	144頁
6月号(912号) 地域コミュニティの持続可能性(2)	(普通号 850円)	96頁
7月号(913号) 地域コミュニティの持続可能性(3)	(普通号 850円)	96頁
8月号(914号) 地域コミュニティの持続可能性(4)	(普通号 850円)	96頁
9月号(915号) 地域コミュニティの持続可能性(5)	(普通号 850円)	96頁
10月号(916号) 若者の未来とキャリアデザイン	(増大号 1,300円)	144頁
11月号(917号) 日本青年館100周年	(普通号 850円)	96頁
12月号(918号) 女性活躍	(普通号 850円)	96頁
1月号(919号) 島根県の社会教育	(普通号 850円)	96頁
2月号(920号) 多様な社会教育のプログラムと人材	(普通号 850円)	96頁
3月号(921号) 2022年度の社会教育・生涯学習の総括と2023年度への展望	(普通号 850円)	96頁

2022年度発行部数

	4月号	5月号	6月号	7月号	8月号	9月号	10月号	11月号
A 取次委託販売数	1,204	1,200	1,200	1,201	1,201	1,194	1,200	1,193
B 直接購読者送数	408	420	417	413	416	423	428	426
合計数	1,612	1,620	1,617	1,614	1,617	1,617	1,628	1,619
印刷部数	2,100	2,050	2,030	2,030	2,030	2,020	2,020	2,020

	12月号	1月号	2月号	3月号
A 取次委託販売数	1,191	1,186	1,285	1,186
B 直接購読者送数	427	424	425	425
合計数	1,618	1,610	1,710	1,611
印刷部数	2,020	2,020	2,100	2,020

4. 青年問題研究所

地域の青年集団を再生し担い手を育成することを目的に、青年問題に関する調査・研究活動を行うほか、地域青年活動のプラットフォームの役割を日本青年館が果たすため、専門家等による統括会議で意見交換を行い、自治体を対象とした青年活動等に関する調査や地域青年活動の事例調査、それらを踏まえた研修事業を行ってきました。

1) 統括会議について

今年度の若者サミットの方向性や実践事例集の内容についての4回にわたって意見交換を行いました。今年度の会議日程および研究体制は以下の通りです。

<会議日程>

- 第1回 期日 2022年7月6日(水)
内容 2022年度の青年問題研究所活動計画について
全国まちづくり若者サミットの方向性について
実践事例集について
- 第2回 期日 2022年12月21日(水)
内容 全国まちづくり若者サミット2023について(プログラムおよび役割)
実践事例集について
- 第3回 期日 2023年2月1日(水)
内容 全国まちづくり若者サミット2023について(発表内容や進行について)
首都圏まちづくり若者サミットについて
実践事例集について
- 第4回 期日 2023年3月31日(金)
内容 全国まちづくり若者サミット2023について
若者・学生団体をどう見るのか
若者サミットと全国青研の合同開催に向けて
実践事例集について

<2022年度常任研究員>

- 井口啓太郎 (国立市教育委員会)
岡下 進一 (元日本青年団協議会会長)
奥 ちひろ (秋田県南 NPO センター)
島田 茂 (元日本YMCA同盟総主事)
辻 智子 (北海道大学准教授)
前田 昇 (認定 NPO 法人本の学校副理事長)
両角 達平 (日本福祉大学専任講師)
矢口 悦子 (東洋大学学長)

2) 首都圏まちづくり若者サミットについて

若者団体が相互に学びあい、交流機会を広げるとともに、その成果を「全国まちづくり若者サミット」へつなげることを目的に、全国まちづくり若者サミットの地方版という位置づけで標記事業を1月29日にパルテノン多摩で実施しました。学生団体「Crenection」を中心に若者自身による実行委員会を構成し、一部企画や運営を担っていただきました。



当日は首都圏で活動する 5 団体が実践事例を発表し、首都圏における地域課題解決の取り組みをバーチャルプランとしてグループに分かれて作りあげるワークショップを行いました。参加登録者数は 62 名（対面参加 43 名／オンライン参加 19 名）。東京や埼玉、神奈川など首都圏の参加者が中心でしたが、オンラインで兵庫や富山、滋賀など遠隔地の方にも参加していただきました。

<首都圏まちづくり若者サミット日程>

- 13:00 オープニング開会挨拶 澁谷 隆（日本青年館公益事業部長）
アイスブレイク 実行委員会
- 13:30 実践事例発表
①大田区若者会議（東京都大田区）
②未来守（東京都昭島市）
③学生団体ニューコロンプス（神奈川県鎌倉市）
④荒川区青年団体連合会（東京都荒川区）
⑤学生団体 Crenection
- 16:00 私が考える地域課題「バーチャルプラン」ワークショップ
- 18:00 クロージング
講 評 井口啓太郎（国立市教育委員会）
主催者挨拶 田中 潮（日本青年館公益事業部事業課長）
主管団体挨拶 城田 空（学生団体 Crenection）
- 18:30 交流会（会場：多摩市若者会議が運営する“未知カフェ”）
- 20:30 終了

3) 全国まちづくり若者サミット 2023

3年ぶりとなる対面参加を中心しつつ、オンライン配信も組み合わせて表記事業を 2 月 11 日～12 日に日本青年館にて開催しました。

4 回目となる今年度は、実践事例発表と少人数でのグループ討議を行うトークセッションに加えて、講演やシンポジウムなどこれまで行わなかった新たなプログラムも取り入れました。また、オンライン配信や、夕食を兼ねた交流会の企画・運営をこれまでサミットに参加、または事例発表を行った団体に協力してもらい、若者自身の事業への参画にも取り組みました。



全 13 団体による事例発表のうち、青年団と若者会議が併存する滋賀県日野町から、双方に所属している日野町連合青年会会長が登壇し、青年団と若者会議の違いや共通点などを報告しました。また、ユースワークをテーマにしたシンポジウムでは、静岡県川根町青年団の事例を紹介し、地域と密接な活動を展開する青年団の意義を参加者に伝えました。

①参加者数について

参加登録者数は 21 都道府県及びマレーシア在住者 1 名を含め 99 名。事業開催中の参加者数は来場参加者が 84 名、オンライン参加者が 15 名でした。

②プログラムについて

◆2月11日(土)

時間	内 容
12:30	開会式 主催者挨拶 日本青年館常務理事 佛木 完 課題の提起 北海道大学准教授 辻 智子
13:00	講演 「お手伝い(仕事)×旅で、地域のファンづくりを」 講師：永岡 里菜さん (㈱おてつたび 代表取締役 CEO)
14:30	トークセッション1「若者が育つ地域とは」 概要：地方自治体とともにすすめる地域活動に学びあい、行政と若者の関係のあり方や今後の課題を探る。 発表：■ひたち若者ががやき会議 (茨城県日立市) ■富田林市若者会議 (大阪府富田林市) ■小川町若者未来会議 (埼玉県小川町) ■日野町連合青年会・ひの若者会議 (仮) (滋賀県日野町) コメント：奥 ちひろ (秋田県南 NPO センター) 辻 智子 (北海道大学准教授)
16:30	トークセッション2「若者が描くまちの未来」 概要：学校という枠を越えて地域で活動する高校生や大学生の実践に学ぶ。企画や仲間のつくり方のヒントを得る。 発表：■とよかわっしょい (島根県益田市) ■未来守 (東京都昭島市) ■Rural labo コメント：前田 昇 (NPO 本の学校副理事長) 島田 茂 (元日本 YMCA 同盟総主事)
18:30	夕食交流会 進行：学生団体 YUZU 「地域と人が大好きな人へ贈る～ツナガル・サミット交流会 2023～@YUZU」

◆2月12日(日)

時間	内 容
9:00	シンポジウム：ユースワークってなに？ ～若者の社会参画でなにがかわる？ 青年団・ユースカウンスルの実践～ 概要：地域に関心を持つ若者の実践に学びながら、若者が当事者として社会に参画してなにが変わるのか、また、その意味を考える。また、ヨーロッパを中心に定着している「ユースワーク」にふれながら、若者の社会参加を後押しする若者政策とはなにか考える。 発表：■尼崎市立ユース交流センター (兵庫県尼崎市) ■(公財)京都市ユースサービス協会 (京都府京都市) ■川根町青年団 (静岡県島田市) コーディネーター：辻 幸志 (NPO 法人こうべユースネット)
10:45	トークセッション3「集まる場所のつくり方」 概要：活動を継続するときに必ず直面するのが拠点づくり。各団体の運営方法から今後のヒントを見つけ出す。 発表：■多摩市若者会議「未知カフェ」 (東京都多摩市) ■一般社団法人 NELD「夢畑」 (神奈川県横須賀市) ■国立市青年室事業「コーヒーハウス」 (東京都国立市) コメント：井口 啓太郎 (国立市教育委員会) 岡下 進一 (元日本青年団協議会会長)

13:15	クロージングセッション 進行：辻 智子（北海道大学准教授）
14:45	終了

4) 実践事例集の発刊準備について

3年間にわたる「全国まちづくり若者サミット」の成果をまとめ広く普及するために、以下の内容で事例集を発刊すべく準備を進めています。

- ＜掲載内容＞
- ①実践事例調査報告
 - ②活動に取り組んでいる若者自身の声
 - ③テーマに即した対談または鼎談
 - ④登壇団体一覧

すでに、実践事例調査では一般社団法人 NELD（神奈川県横須賀市）、多摩市若者会議（東京都多摩市）のほか、宮城県の青年団に聞き取りを行っています。また、若者自身の声についてもサミットに参加した若者を中心に執筆依頼を行っていく予定です。なお、作成した事例集は全国の市区町村教育委員会へデータ配布するとともに、地域の若者団体にも活用いただく予定です。

5) WEB マガジン『日本青年館まちづくり若者 lab』

2021年9月1日より SNS「note」を使用して開始したウェブマガジンには、現在、20本の記事・動画を公開し、総閲覧数は4,124回となっています。執筆は主に地域活動に取り組む若者自身が他の団体取材しました。引き続き、若者サミットの事例発表団体を中心に記事を掲載していく予定です。右記のQRコードから閲覧可能です。



時期	タイトル	取材対象
2022.04	けんけんの東欧見聞録③ロシア編	
2022.05	子どもが育つ地域をつくる	遊佐町少年議会
2022.07	空き店舗を若者の活躍の場に	飯山市若者会議
2022.07	若者の熱量が集う場所	ねつせた！
2022.09	地域との接点が若者を育みまちを活気づける	新城市若者議会
2023.03	魅力を探り再開発を導く若者の発想力	大田区若者会議
2023.03	多様な若者 共通する思い	若者サミット 2023

5. 図書・資料センター

日本で唯一、戦前・戦後期の地域青年団活動資料を多数所蔵する当館の図書・資料センターは、財団設立4年後の1925（大正14）年に建物の竣工とともに付設されました。当時は、数少ない一般公開の図書館として市民にも広く活用されていました。近年は、資料センターとしてとりわけ社会教育関係者、研究者、学生、自治体史編さん関係者、メディア関係者等多くの方々に利用され、貴重な資料の保存と資料センターとしての役割を担ってきました。今年度は、以下の作業を進めてきました。

1) 資料室の閲覧、問い合わせ

2022年度の来館での閲覧は延べ3件でした。研究者の閲覧2件は、どちらも神戸女学院大学文学部の河島真教授による田澤義鋪が出版した雑誌『新政』『大政』などの科研費調査でした。

術と音楽性の向上を目的に、全日本高等学校オーケストラ連盟主催、日本青年館後援により 7 月 25 日～28 日の日程でサマースクールを山中湖旭日丘温泉ホテル清溪にて開催しました。3 年ぶりの再開となり、全国 19 校 114 名の高校生が参加しました。最終日にシベリウスの交響詩《フィンランディア》などを演奏し 4 日間の成果を発表しました。

2) 第 5 回全国高等学校サマーオーケストラ

音楽を作り上げるための実践的な指導を通じて、高い技術と音楽性を身に着けることを目的に全日本高等学校オーケストラ連盟主催、日本青年館後援により 8 月 16 日～19 日の日程でサマーオーケストラを山中湖旭日丘温泉ホテル清溪にて開催し、全国 18 校 112 名の高校生が参加しました。昨年は無観客での収録のみとなりましたが、今年は最終日に富士吉田市のふじさんホールにおいて 3 年ぶりに有観客での特別演奏会を開催。モーツァルトの歌劇《魔笛》序曲とドヴォルザークの交響曲第 8 番の全楽章を演奏しました。



3) 第 29 回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ

日本最大の高校オーケストラの祭典、『第 29 回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ(オケフェス)』を開催しました。新型コロナウイルスの影響により第 27・28 回は日本青年館ホール収録動画と各校で収録した動画を組み合わせたオンライン開催となりましたが、今年度は実に 3 年ぶりに日本青年館ホールに生徒が集まりお互いの演奏を鑑賞する対面開催が実現しました。



今回は全国 80 校より 3,870 名が参加。12 月 25 日～28 日の 4 日間にわたり日本青年館ホールに高校生たちの熱演が響き渡りました。参加校生徒が励ましの言葉を送り合うメッセージカードも再開し、コロナ禍前のようにホールは全国のオーケストラを愛する高校生たちで賑わいを見せました。

一方、東京までの遠征が困難で自校で撮影した演奏動画を提出する形での参加を希望する学校もあり、対面参加した学校の演奏動画や選抜合奏の動画と併せて 2 月 15 日～3 月 31 日まで公式 YouTube チャンネルで一般の方も視聴できる形で公開し、オンラインでも生徒同士がメッセージを送り合いました。期間中の視聴者数は約 14,000 名、視聴回数は約 57,000 回、視聴時間は約 3,300 時間を記録し、一般の方々にも高校生の熱演をお楽しみいただきました。

また、期間中に厳しいオーディションにより各校から選抜された生徒によって編成される高校生の憧れの舞台「選抜合奏」は、25～26 日の A 日程がオーケストラ 97 名、弦楽アンサンブル 50 名、27～28 日の B 日程がオーケストラ 95 名、弦楽アンサンブルが 47 名の生徒によってそれぞれ編成され演奏を披露しました。選抜生徒による演奏曲目と指揮者は下記の通りです。

<選抜オーケストラ>

演奏曲目 W.A. モーツァルト／歌劇《魔笛》序曲 K. 620
A. ドヴォルザーク／交響曲第8番よりト長調 Op88 第4楽章
指揮者 河地 良智（洗足音楽大学名誉教授・前同大学副学長）

<選抜弦楽アンサンブル>

演奏曲目 A. ドヴォルザーク／弦楽のためのセレナード ホ長調 Op22 第1・4楽章
指揮者 大河内 弘（元日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）

ホール2階席限定で選抜合奏と各校演奏の有料鑑賞を行い、保護者を中心に約2,000名と過去最多の来場者数を記録しました。新型コロナウイルスの影響で多くの音楽イベントが中止になる中、開催を続けてきたことでオケフェスへの注目が高まる形となりました。

また、今年度はコミックが累計400万部を突破し2023年4月よりNHKのEテレでアニメ放映がスタートした高校オーケストラを舞台にした人気漫画『青のオーケストラ』とのコラボレーションが実現しました。作者の阿久井真先生からご厚意でオリジナルの書き下ろしイラストを提供していただきプログラムの表紙やポスターを飾りました。

さらに、『オケフェス×青のオーケストラ』のコラボ記念グッズを会場とWEBで販売し、ホール入り口には阿久井真さんがオケフェスためにお寄せいただいた直筆の色紙が飾られるなど、参加者にとっても一般の来場者にとっても楽しめるイベントとなりました。

なお、今年度は26日に文部科学省藤江陽子総合教育政策局長に出席いただき、選抜合奏を鑑賞した後に来賓挨拶をいただきました。さらに期間中、『青のオーケストラ』の作者の阿久井真氏、アニメ版の声優を務める佐藤未奈子氏、読売日本交響楽団の林路郎理事長にも来場いただきました。



4) 全日本高等学校オーケストラ・ワークショップ

新型コロナウイルスの影響で3年にわたり開催できていない「全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演」の代替企画として、『全日本高等学校オーケストラ・ワークショップ』を3月30日～31日に大久保のクラシックスペース100にて開催しました。募集開始と同時にほとんどのパートが締め切りになるなど、生徒たちからも大きな期待が寄せられ全国33校より83名が参加しました。



講師にはヴァイオリン奏者で元広島交響楽団第1コンサートマスターの佐久間聡一さん、サイトウキネンオーケストラ・水戸室内管弦楽団にも参加しているクラリネット奏者の中ヒデヒトさん、神奈川フィルハーモニー管弦楽団ホルン奏者の熊井優さんなど音楽界の一線で活躍する演奏家を招き、指揮者の河地良智先生の指揮でフィンランドを代表する作曲家シベリウスの交響曲第2番に挑戦しました。

参加者には高校3年生も多く、高校生活最後のひとときを全国のオーケストラを愛する仲間たちとの楽しい思い出で締めくくりました。

課題曲 J. シベリウス／交響曲第2番 ニ長調 Op. 43 より第1・4楽章

指揮：河地 良智（洗足音楽大学名誉教授・前同大学副学長）

講師：佐久間聡一（ヴァイオリン奏者・元広島交響楽団第1コンサートマスター）

中ヒデヒト（クラリネット奏者・サイトウキネンオーケストラ・水戸室内管弦楽団メンバー）

熊井 優（神奈川フィルハーモニー管弦楽団ホルン奏者）

8. 第27回清溪セミナー

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきた本セミナーは、青年団出身の若手政治家の手によって1997年2月に第1回目が開催されました。大きな特色の一つは、全国から選出された実行委員による自主的な運営であること。二つ目は、参加者の声を活かし時宜を得たテーマを設定し、本セミナーの趣旨をご理解いただく専門の講師をお招きしていること。三つ目は超党派であることが挙げられます。



第27回目を迎える清溪セミナーは新型コロナ対策として始めたオンライン受講を継続し、対面参加を中心としながらオンライン参加（ライブ視聴とオンデマンド視聴）も設定して、10月17日～18日に日本青年館にて開催しました。感染対策として、会場に入る人数を80名程度に抑え、夕食懇親会は行わず2日目に昼食をとりながらの情報交換会としました。参加者は対面参加が84名、オンライン参加が29名、合計113名とコロナ前に近い参加者数になりました。

1日目の主なテーマを地方創生とし、2日目は自治体DXのほかワークライフバランスや若者の政治参加をプログラムに取り入れました。

◆10月17日

講義Ⅰ 「今あらためて地方創生を考える」

講師：石破 茂 氏（衆議院議員）

講義Ⅱ 「徳島県神山町 人口 5000 人の小さな町はなぜ進化し続けるのか」

講師：大南 信也 氏

（神山まるごと高専設立準備財団代表理事）

講義Ⅲ 「地方創生 議会と自治体が果たすべき役割」

講師：木下 斉 氏

（一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス代表理事）

◆10月18日

講義Ⅳ 「民学産公官の協働によるコミュニティ創生とDX化の課題」

講師：清原 慶子 氏（前三鷹市長）

講義Ⅴ 「結婚・出産数が増加！残業や離職率は減少！さらに業績が向上する

働き方改革の方法とは 2000社の働き方改革コンサル事例から紹介」

講師：小室 淑恵（株式会社ワークライフバランス代表取締役社長）

昼食・全国情報交換会

進行：早稲田大学鵬志会 栗林 魁さん、山内 里紗さん

講義Ⅵ 「若者が声を届け、その声が響く社会を目指して」

講師：能條 桃子 氏（一般社団法人NO YOUTH NO JAPAN代表理事）

9. 田澤義鋪記念会

田澤義鋪（1885（明治18）年～1944（昭和19）年 日本青年館第5代理事長）は、25歳で静岡県安倍郡長として青年団にかかわります。その後内務省明治神宮造営局総務課長を務め、明治神宮の造営にあたり青年団の労力奉仕を建議。明正選挙運動にも多大な貢献をしました。

こうした田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、その実現に努めることを目的に、毎年田澤義鋪記念会を開催しています。

1) 田澤義鋪記念会総会

毎年11月1日に明治神宮で開催される秋の大祭に合わせ、田澤義鋪記念会総会を開催していましたが、今年度は日本青年館財団設立100周年・日本青年団協議会結成70周年記念式典に合わせて11月3日に実施しました。今年度の田澤会会費納入は、個人77名、12団体より336,000円となっています。

2) 田澤義鋪賞

今年度も日本青年団協議会顕彰制度「全国地域青年実践大賞」の特別賞として、大分県大分市舞鶴町青年会に田澤義鋪賞を授与しました。新型コロナウイルス感染対策のためのガイドラインの作成、お賽銭の非接触型への切り替えなどの取り組みが審査員に評価されました。

3) 第188号田澤会通信の発行

3月23日付で第188号田澤会通信を発行しました。佐賀県鹿島市の鹿島小学校の田澤義鋪の漫画の劇化の取り組みや、田澤義鋪とも関係の深い教育者松原一彦の生涯が紹介されています。

10. 国際交流活動

1) 中日青年交流センターとの交流

中日青年交流センターは、1984年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との共同発意により、日中友好21世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により1991年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援・交流するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により両国間の往来が出来ないため、昨年度に続き中国代表団の受け入れ及び日本からの代表団派遣の双方とも中止としました。

11. 日本青年館財団設立100周年・日本青年団協議会結成70周年記念事業について

1) 日本青年館財団設立 100 周年・日本青年団協議会結成 70 周年記念式典について

(1) 記念式典について

コロナ禍により 1 年延期していた日本青年館財団設立 100 周年および日本青年団協議会結成 70 周年の記念事業を、11 月 2 日～3 日にかけて日本青年館ホールなどで開催しました。できるだけ多くの青年団 OB・OG の出席のもとで開催することや財団設立の原点を振り返ることをめざし、全国青年団 OB 会や田澤義鋪記念会との同時開催としました。



11 月 2 日に行った記念式典には、秋篠宮皇嗣同妃両殿下をお迎えし、日本青年館ならびに日本青年団協議会が積み重ねてきた歴史に寄り添いながら今後への期待を込められたお言葉を皇嗣殿下より賜りました。また、磯崎仁彦内閣官房副長官にもご出席いただき、岸田文雄内閣総理大臣の祝辞を代読いただきました。その後、佛木常務理事がスライドを用いて 100 年の経過報告を行った後、祝賀芸能として那智田楽保存会による「那智の田楽」が披露され、両殿下と官房副長官も鑑賞されました。

全国の青年団 OB・OG や現役青年団員など 146 名に加え、青少年団体や社会教育関係団体、スポーツ団体をはじめ、関係企業や行政関係者、各政党の青年関係部局の国会議員など総勢 513 名の方々にご出席いただきました。

(2) 記念企画について

記念式典に続いて行った記念企画は、主に若者たちに焦点を当てたプログラムにしました。オープニングは東京都立青山高等学校の青山フィルハーモニー管弦楽団が祝賀演奏を行い、築和生文部科学副大臣より演奏鑑賞後に祝辞をいただきました。

記念講演では長く青年団や日本青年館を応援していただいている東洋大学学長で当財団の評議員でもある矢口悦子氏に登壇いただき、長い歴史の中で日本青年館や日本青年団協議会が果たしてきた役割を振り返りながら、これからの青年団や青年館の公益活動に対する期待が語られました。

最後は若者自身からのメッセージとして、全日本高等学校選抜オーケストラフェスタなどの

事業参加をきっかけに日本青年館が実施してきた音楽事業の OBOG らが中心となり創設された市民オーケストラ「ユージェント・フィルハーモニカー」で音楽活動に取り組む団員の鬼澤大地さんと、滋賀県もりやま青年団団長の松井里美さんが登壇しました。鬼澤さんからは、日本青年館のオーケストラ事業で成長のきっかけを掴んだことが、松井さんからは、地域の青年団活動や青年会館での交流を通じて仲間と出会い成長した体験が語られました。

(3) 全国青年団 OB 会第 40 回総会東京大会・第 77 回田澤義鋪記念会総会について

記念式典の翌 3 日、全国青年団 OB 会と 2 年間開催できなかった田澤会の総会が合同で行われました。全国 27 都道府県から 175 名が参加する中、全国青年団 OB 会の小野寺喜一郎会長と榎信晴理事長が主催者挨拶を行い、日本青年団協議会の中園謙二会長より来賓挨拶をいただきました。総会は、全国 OB 会および田澤会の昨年度の事業や会計の報告などが承認されたほか、全国青年団 OB 会旗が小野寺会長から次年度開催地の石川県青年団 OB 会に引き継がれ、同会の木本利夫会長から 2023 年 10 月 29 日～30 日に予定されている石川大会への参加が呼びかけられました。

また、「明治神宮と青年団の造営奉仕」と題する記念講演が、明治神宮国際神道文化研究所主任研究員の今泉宜子氏により行われ、その後明治神宮へ移動し約 150 名で正式参拝を行いました。

(4) ウィーン・ピアノデュオ・クトロヴァッツ (PDK) 記念コンサートについて

11 月 3 日午後、およそ 1200 名の方々をご招待して日本青年館財団設立 100 周年記念の標記コンサートを開催し、ショスタコーヴィチやリスト、ピアソラなどの曲を 2 時間にわたり披露しました。記念式典の招待者をはじめ、日頃ご支援をいただいている関係団体や企業、個人へご案内したところ、コンサート開催日まで 1 か月を残して満席となり大きな反響を呼びました。



(5) その他

- ・ 2015 年度の全国青年団 OB 会東京大会にあわせて発行した『明治神宮と青年団の造営奉仕』（今泉宜子氏著）を、日本青年館財団設立 100 周年にあわせて改訂版を 500 部作成し、全国青年団 OB 会・田澤会の総会出席者に配布しました。
- ・ 日本青年館の 100 年の歩みをまとめたパネルを製作、記念事業や記念コンサート会場でも展示しました。
- ・ 記念式典の開催にあわせ、雑誌『社会教育』11 月号は、日本青年館の 100 年の歩みをたどり、矢口悦子評議員や今泉宜子氏による寄稿のほか写真で振り返る日本青年館の歴史や、未来を展望する内容の特集し、式典出席者全員に配布しました。

2) 『日本青年館 100 周年記念誌』の発行について

財団設立 100 周年記念事業の一つとして進めてきた記念誌が完成しました。タイトルは『日本青年館 100 周年記念誌～若者と歩み、人々が集い、文化を紡いだ一世紀～』。記念誌の発行は、1991 年 9 月に発行された『財団法人日本青年館七十年史』及び『若者たちと歩みつづけて』以来のことで、日本青年館の歴史をまとめただけでなく、記念式典における秋篠宮皇嗣殿下のお言葉の掲載や、記念企画の様子を写真などにより掲載することで、式典当日の記録を残す内容としました。記念誌の編纂・執筆は公益事業部を中心に分野ごとに担当職員が行い、全体の統括と監修を佛木常務理事が行いました。

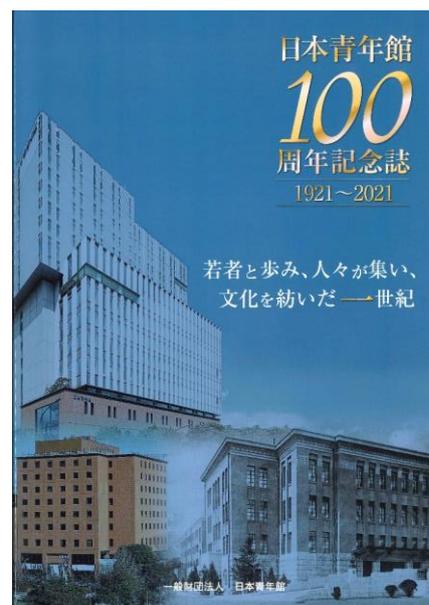
【100 周年記念誌の構成】

- ①グラビア「写真でたどる日本青年館の 100 年」
- ②通史「日本青年館 100 年の歩み」
- ③三代目日本青年館の建設
- ④財団運営を支える収益活動
- ⑤日本青年館の多彩な公益活動
- ⑥資料編・年表

記念誌は 500 部発行し、青年館役職員や関係機関、日本青年団協議会、青年会館および OB 会、神宮外苑地区関係者などに謹呈する予定です。一部有料にて頒布するため ISBN 出版者記号を発行し、書店での取次販売も可能としました。(定価 5,000 円 税別)

3) 日本青年館 100 周年記念式典・記念企画』記念 DVD について

11 月 2 日に行った標記記念式典・記念企画を収録した記念 DVD を 130 枚作成し、日本青年館役職員、日本青年団協議会、各道県青年会館や OB 会、関係機関などに謹呈しました。



12. 関連事業

1) 全国青年会館協議会活動

各県における青年団運動の拠点としての役割を担う青年会館の建設は、昭和25年2月の佐賀県青年会館がスタートでした。その後、各地に青年会館の建設運動が起こり、現在22の都道県に青年会館があります。それらの青年会館同士の連絡協調と青年団体の振興、地域社会の発展を図ることを目的として、全国青年会館協議会が組織され活動しています。

主な活動内容は、財団運営に関わる研修、青年団をはじめとする青少年団体への支援、施設運営のノウハウの相互交換など多岐にわたっています。今年度は以下の活動を展開してきました。

(1) 全国青年会館協議会総会

7月19日～20日の日程で、山口県の防長青年館において全国青年会館協議会総会を実施し13会館より23名が参加しました。19日の総会では、コロナ禍で各会館が厳しい運営を余儀なくさ

れている状況と、その中でも難局を乗り切るための様々な取り組みや財務的な対策、また、地域での新たな活動への取り組みが報告されました。翌20日は秋吉台展望台、元乃隅神社などを視察し1泊2日の日程を終了しました。

(2) 全国青年会館協議会理事長会

2023年2月9日に日本青年館において全国青年会館協議会理事長会を実施し、15会館より25名が参加しました。理事長会の中では、日本青年館の顧問税理士である高山昌茂氏を講師に「公益目的支出計画と公益法人制度の今後について」というテーマで講演いただき、一般財団法人の運営において注視すべき法令や定款に記載されている内容等のチェックポイントなどを学ぶ機会となりました。また、事前アンケートをもとに各会館の状況報告と意見交換を行いました。

(3) 加盟青年会館一覧（2022年3月31日現在）

一般財団法人北海道青年会館	〒060-0806	札幌市北区北六条西6-3-1	TEL011-726-4235
一般財団法人岩手県青少年会館	〒020-0196	盛岡市みたけ3-38-20	TEL019-641-4550
一般財団法人宮城県青年会館	〒983-0836	仙台市宮城野区幸町4-5-1	TEL022-293-4631
一般財団法人秋田県青年会館	〒011-0905	秋田市寺内神屋敷3-1	TEL018-880-2303
福島県青年会館	〒960-8103	福島市舟場町3-26	TEL024-523-1484
茨城県立青少年会館	〒310-0034	水戸市緑町1-1-18	TEL029-226-1388
(公益社団法人茨城県青少年育成協会)			
一般財団法人栃木県青年会館	〒320-0066	宇都宮市駒生1-1-6	TEL028-624-1417
群馬県青少年会館	〒371-0044	前橋市荒牧町2-12	TEL027-234-1131
(公益財団法人群馬県青少年育成事業団)			
一般財団法人福井県青年館	〒910-0005	福井市大手3-11-17	TEL0776-22-5625
一般財団法人静岡県青少年会館	〒420-0068	静岡市葵区田町1-70-1	TEL054-255-2566
一般財団法人愛知県青年会館	〒460-0008	名古屋市中区栄1-18-8	TEL052-221-6001
一般財団法人滋賀県青年会館	〒520-0851	大津市唐橋町23-3	TEL077-537-2753
一般財団法人島根県青年館	〒690-0033	松江市大庭町1751-13	TEL0852-21-2818
一般財団法人岡山県青年館	〒700-0081	岡山市北区津島東1-4-1	TEL086-254-7722
一般財団法人防長県青年館	〒753-0064	山口市神田町1-80	TEL083-923-6088
一般社団法人香川県青年団体育成支援協議会	〒769-0102	高松市国分寺町国分1009番地	TEL087-874-0713
特定非営利活動法人高知県青年会館	〒781-2122	吾川郡いの町天王北1-14	TEL088-891-5300
一般財団法人佐賀県青年会館	〒849-0923	佐賀市日の出1-21-50	TEL0952-31-2328
一般財団法人熊本県青年会館	〒862-0950	熊本市水前寺3-17-15	TEL096-381-6221
一般財団法人沖縄県青年会館	〒900-0033	那覇市久米2-15-23	TEL098-864-1780
(事務局)一般財団法人日本青年館	〒160-0013	新宿区霞ヶ丘町4-1	TEL03-6452-9015

2) 全国青年団OB会

2022年度の全国青年団OB会第40回総会は日本青年館の財団設立100周年記念事業と併せ、11月2

日～3日に東京・日本青年館で実施いたしました。

3) 大九報光会

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が1950年（昭和25年）11月1日、明治神宮御鎮座30年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。今年度の総会は新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止としました。

4) 清溪フォーラム行政懇談会

青年団出身の首長で組織している清溪フォーラムの行政懇談会を毎年開催していましたが今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止としました。会員は以下の通りです。（敬称略）

会 長 伊藤 康志 （宮城県大崎市長）
幹 事 若生 裕俊 （宮城県富谷市長）
監 事 保坂 武 （山梨県甲斐市長）

5) 社会教育士実習生の受け入れ

2020年度から大学で社会教育主事養成課程を履修すると「社会教育士」の資格が付与されることになり、その過程において社会教育の現場での実習が必須となりました。日本青年館では公益事業部が窓口となり、今年度は東洋大学文学部教育学科から6名の学生を受け入れ、日本青年館財団設立100周年記念事業全般や高校オーケストラ支援事業、図書・資料センターなどで業務体験いただきました。

また、日青協では法政大学からの要請を受け5名、和光大学から1名の実習生をそれぞれ受け入れ、子ども事業やオンライン学習会、全国青年大会の準備と実施に携わりました。

13. 後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援・協力をした事業は下記のとおりです。

1) 第48回太陽美術展 11月9日～11月16日

（主催：太陽美術協会）

※後援名義使用、日本青年館賞提供